

ストア的であるとは別の仕方

——スピノザ『エチカ』第4部付録第32項の問題

笠松 和也(東京大学)

フランスのスピノザ研究の大家であるアレクサンドル・マトゥロンがかつて『エチカ』の中で最もストア的なテキストと呼んだものがある。それは『エチカ』第4部付録第32項である。そこでは、(a)人間の力能はきわめて制限されているがゆえに、われわれは自らのなしえないことに出会うこと、だが(b)理性の本性にしたがうかぎり、われわれはそれに落ちて耐えること、そして(c)そのことから充足が生じ、自らの理性の欲望が全自然の秩序と一致することが語られる。これら三つの点は、なるほどストア的であるように思われる。

しかし、このテキストには二つの重大な問題がある。一つは、スピノザがここで唐突にストア的な語り方をしていることである。定義と公理から出発する証明体系において、なぜこうした語りが必要とされるのだろうか。また、この箇所の直後に当たる第5部序言で批判されることになるストア派の教説にあえてここで接近する意味は何なのだろうか。もう一つは、この項で書かれている内容が『エチカ』の中のどこにおいても直接的には証明されていないことである。そもそもこの付録は、付録自体の冒頭に書かれているように、第4部の各所で証明された事柄を「一目で見られようようにするために」整理する役割を担っているはずである。事実、第1項から第31項までは、第4部のどこで証明されているのか、容易に見いだすことができる。ところが、最後の第32項だけは、精確に言って第4部のどの定理に対応しているのかよく分からない。もし仮に、第32項の内容が『エチカ』のどの箇所からも導き出せなかったとしたら、この項は単なる空疎な記述になってしまう。したがって、われわれがなすべきことは二つある。一つは、第32項のストア的な語りの下で一体何が問題になっているのかを精確に取り出した上で、『エチカ』の定理をもとにして再構成すること。もう一つは、第32項の置かれている文脈に着目しながら、あえてここでストア的な語りをするの意義を探ることである。

マトゥロンは、第32項を三つの段階に分け、そこにおいてストア的な語り徐徐にスピノザ固有の思考へと移行していくことに着目した上で、『エチカ』の読者を導く上でのストア的な語りもつ戦略性を明らかにしている。まず、第一の段階では、われわれがなしうることとなしえないことを見いだされた上で、われわれが理性の本性にしたがうかぎり、自らのなしえないことに落ちて耐えるであろうことが示される。マトゥロンによれば、この記述は「漠然とストア的」であり、ここにおいてはストア派とスピノザの差異は明らかではない。次に、第二の段階では、われわれが自らのなしえないことに耐えるのを認識することから、われわれの理性がそのことにおいて充足し、その充足を保持しようとすることが示される。ここでマトゥロンが問題とするのは、「そのことにおいて充足する」と言われる時の「そのこと」とは何なのかである。彼によれば、これは文法的には二つの解釈が可能である。一つは、「われわれの過誤が全自然の必然性の帰結であることにおいて充足する」と読む解釈である。これは、キケロやセネカから後期ストア派に見られる発想に相当する。もう一つは、「われわれの過誤が全自然の必然性の帰結であると認識することにおいて充足する」と読む解釈である。これが、ストア派とは異なるスピノザ自身の立場に当たる。もちろんスピノザの真意を読み取るだけであるならば、この二つの解釈の可能性は迷う余地はない。

だが、むしろここで重要なのは、一つの文が2通りの解釈に開かれたまま与えられているという事実である。ここにおいて、漠然とストア的であった記述から、ストア派とスピノザの両方に可能性が開かれた記述へと移行する。しかし、ここではまだそのどちらであるかは決定されていないのである。最後に、第三の段階では、われわれが理性の本性にしたがって認識するかぎり、理性の欲望は全自然の秩序と一致することが示される。ここに至って、第二の段階で開かれていた二つの可能性はスピノザの思考の方へと収斂する。この意味において、第32項におけるストア的な語りや、読者をスピノザの思考へと導く役割を担っていると言うことができる。マトゥロンはこのように分析した上で、第32項に二つの意義があることを指摘している。一つは、第32項を単独で見れば、理性の本性にしたがって認識する人に向けた「慰め(consolation)」になっていることである。もう一つは、第4部全体から見れば、理性の本性にしたがって認識しているにもかかわらず、なぜ慰めが必要とされるのかを、その原因の観点から説明することを通して、第5部で主題的に論じられる直観知へと読者を導いていることである。これこそが、第32項の記述がまさに第5部の直前のこの箇所に置かれていることの意味である。

マトゥロンのこの解釈は、第32項におけるストア的な語りもつ意義を説明した点で、非常に重要である。これに対して、本発表では別の観点に着目することを通して、マトゥロンの解釈を引き延ばすことを試みたい。その際、問題となるのは、「われわれは落ちて耐えるであろう(aequo animo feremus)」という表現である。これがスピノザ哲学において一体何を意味しているのかを考察しながら、第32項の固有の役割を取り出すことを目指す。

そのためには、まずここで言う「耐える」とはいかなることであるのかを考察しなければならない。ここには三つの層がある。第一の層は、われわれが自己の力能と無力能(自らのなしうることとなしえないこと)を認識する層である。その前提として、『エチカ』第4部定理1-18で示されたように、人間の實在が外的原因との比較の地平に位置づけられなければならない。というのも、人間の本性を見るだけでは、そこには何ら否定性は含まれておらず、ある一定の規定された神の力能が表現されていることしか導き出されないため、そもそも力能と無力能という対が設定できないからである。そのうえで、自己の力能と無力能の対を認識することは、いかなる自己知であるのかが説明されなければならない。第二の層は、自己の無力能から力能へと注意を向け変える層である。ここでは、自らのなしえないことから注意を逸らし、自らのなしうることへと注意を向け変えることが問題となる。『エチカ』の中でその役割を果たすのは、「驚き」である。というのも、『エチカ』において、驚きとは精神をある表象像へと釘付けにするような表象のあり方に他ならないからである。しかし、この驚きがどのように働くのかは、第4部の中では明示的に示されていない。そのため、第3部における驚きに関する記述から、第32項における驚きの役割を再構成する必要がある。第三の層は、自己の力能(自らのなしうること)のみに着目して認識することから、自己充足を引き出す層である。第3部における「自己充足」の定義に照らして見た場合、この充足がなぜ生じるのか、そしていかなる種類の充足であるのかが論じられなければならない。

本発表では、以上を論じることを通して、『エチカ』第4部第32項が人間の自己知という観点からどのような意味をもっているのか、そしてそれがストア的な語りの下で示されることにどのような意義があるのかを明らかにする。